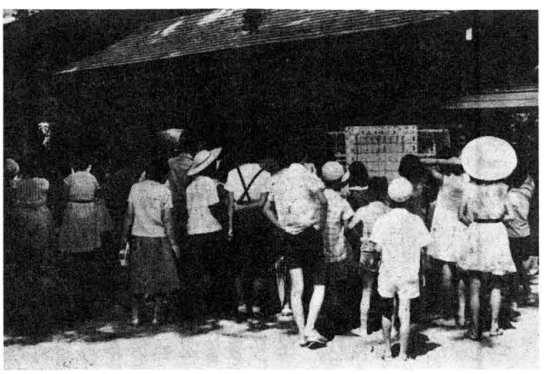
宗像

毎月十五日発行
発行所　宗像大社社務所
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
年定価一送料共 1000円

第二十一回中津宮七夕揮毫会
腕を競う多数の参加者



第二十一回中津宮七夕揮毫会は去る七月二十六日、当大宮中津宮二本年度は例年の予選審査を行なわず申込み者全員参加となった。当日は前日来の台風の余波も全く鎮座の大島で盛大に執りなわれた一おさまり、からりと晴れ上った夏空に約五百五十名の小中学生が、早朝より先生や父兄に引率され、続々と神湊波止場に集合。午前七時より神湊と大島を結ぶ海上約十粁の航路を二隻の渡海船「弁天丸」「はフル運転。

会場の大島小、中学校の教室では身体中汗にまみれ精魂こめて懸命に筆を走らせる受書道家等の熱気あふれ、同伴の先生や父兄の心配をよそに見事な作品が出来上った。

作品は中津宮神前に奉納され、審査の間に照海殿の海辺で恒例のサザエ採りが行われた。

一方、審査は中津宮斎館で坂口雅風、城戸筑山両先生を始め、地元の先生方の手によって厳正入念に行われたが、作品は何れも優秀な出来ばえで甲乙がつけ難く、しばし審査の先生を悩ませる場面もあった。

午後四時社頭で講評引続き表彰式が行われ、入賞者には賞状賞品が贈呈された。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市博多区東公園二丁三一（〒八三）
電話福岡（九二）六五一一九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇）
電話京都（〇五）三三一一三三八一（代）～六番

表彰者名

小学生の部

夕刊フクニチ賞
【一年】山本　まき子（赤間）
【二年】吉武　ひろみち（東郷）
【三年】中山　ゆり（日の里東）
【四年】山本　玲子（赤間）
【五年】吉田　康政（日の里）
【六年】高田　修（福間）

特選
【一年】中村　けんじ（赤間）
【二年】永島　明（赤間）
【三年】花田　憲彦（玄海）
森田　健文（赤間）
【四年】遠藤　恭子（河東）
中山　朗（勝浦）
【五年】高畑　由美子（赤間）
荒川　勝典（赤間）
【六年】田中　美穂（河東）

準特選
【一年】立部　ゆうこ（玄海）
まつもとはるみ（河東）
山口　英朗（日の里西）
森　良博（赤間）
【二年】しぎょう　ゆか（赤間）
塚本　裕司（津屋崎）
中野　かんじ（玄海）
舛谷　佳衣（玄海）
【三年】立部　敦士（玄海）
中野　剛（玄海）
力丸　真美（玄海）
三坂　昭博（赤間）
森　明子（神興）
【四年】安井　恵行（赤間）
吉武　良浩（東郷）
本村　千秋（赤間）
荻尾　昇重（赤間）
【五年】加藤　幸枝（赤間）
永嶋　聡志（東郷）
熊谷　俊広（赤間）
中野　薫（大島）
【六年】中牟田　哲哉（玄海）
深田　理江（赤間）
高崎　由紀子（赤間）

金賞
【一年】かませ　えみ（南郷）
やすい　とも子（東郷）
しばた　ちぐさ（神興）
佐々木　徹（日の里西）
船越　陽子（日の里西）
【二年】上野　よう子（東郷）
伊藤　敦子（日の里西）
吉武　律子（東郷）
茂呂　あきら（河東）
牛草　綾乃（日の里西）
【三年】吉武　輝佳（赤間）
松尾　智子（赤間）
阿部　弘子（津屋崎）
中野　けん一郎（河東）
山口　てつじ（赤間）
武富　昌子（赤間）
梅田　陽（赤間）
池浦　みさ（赤間）
田志　純子（大島）
【四年】平田　美奈子（津屋崎）
阿部　美奈子（赤間）
合原　政幸（赤間）
日高　由美子（赤間）
松尾　由美（赤間）
【五年】五反田　仁美（河東）
長瀬　健二郎（津屋崎）
茂呂　明美（河東）
村山　俊文（東郷）
荒木　智美（津屋崎）
中山　深（東郷）
【六年】中村　博人（大島）
杉之原　美幸（赤間）
石津　啓子（津屋崎）
安永　万里子（東郷）

中学生の部

夕刊フクニチ賞
【一年】橋田　秀幸（津屋崎）
【二年】石松　和徳（城山）
【三年】荷田　千鶴（福岡）

準特選
【一年】中山　洋（玄海）
安井　元昭（中央）
【二年】宗像　ちか（玄海）
川原　美恵（津屋崎）
【三年】浜　英朗（中央）

金賞
【一年】小畑　由美（岡垣）
重永　龍一（城山）
【二年】遠藤　雅恵（大島）
高田　和子（福間）
【三年】川崎　学史（津屋崎）

最優秀賞
高田　修（福間小六年）
石松和徳（城山中二年）

論説
農耕風土の変貌
―里帰り同胞の哀感―

去る昭和四十八年秋のオイル・ショック以来、わが国に、トリレンマ（三重苦）という深刻な不況を意味する用語がしきりに使われている。多くの国々が、国際収支の大幅赤字、二けたインフレ、不安感を伴う不況にあえいできた。サンファンで開かれた先進七カ国首脳会議も、世界的経済会議としては歴史的意義も重く、一国だけでは解決されない不況脱出の苦悩を背景としたものであった。

二年続きの水面下不況と表現される不安感は、国民に金のためには、生きるためには物質依存・自己擁護の生活観を、一層強く植え付けたようである。それは知らず知らずの内に、道義観を離脱して唯物主義観への奔走さえ意味する。それを助長したものが、折も折発売となりがたくないロッキード事件であった。

物のあわれを知るサムライは益々減って、トリレンマなどの傷をいやして景気回復の足どりのみを気にするエコノミストが増えてきた。昨今の新聞や放送の内容にも注意すると、その傾向は歴然たるものがある。どれもこれも、政治不信・社会不安・懐疑反発を基調としたものはない。

特に解釈に苦しむ一例は、毒物を含み食糧になるため所謂「汚染米」の耕作である。作る者も食べない、買い上げる政府も売られない。然し、その汚染米を穫るための田植えを毎年続けている。食べられなくてもよい、金になればよい、生活のための労作であればよいでは、農民の精神は存在しない。ただのエコノミストの算盤だけが動いている。

こうした農耕風土に変貌しつつある祖国に、故郷の農山村に、海外移民として若き日に南米に渡り、数十年ぶりに万感を懐いて里帰りした同胞は、何を見たか。何に親愛の情をたぎらせ心から喜んだか。結果として南米へ帰る同胞の中に「富士山はあったが、故郷はなかった」との哀感を残す者も少くない。

古い言葉に「国破れて山河あり」とある。外敵に対じ、誇りも自負も無残に潰された時、敗北の国土に山河はあっても、民族の精神は滅したことを指したものか。ルバング島に独り戦って、教えられた戦陣訓武士道を守って、捕虜の恥辱より餓死を選ぶ覚悟だった小野田寛郎氏が、生還を喜ばずにブラジルへ去った心境にも、故郷はなかった切々たる悲哀があったものと想察される。

豊後の奥山の温泉宿で、里帰り同胞数名がロビーに憩いながらの話を聞く機会があった筆者、老人達の素朴偽らぬ真情に、少からず心を打たれたことがある。彼等は懐旧の情に胸ふくらませて日本の土を踏み、富士の白峯を仰いで喜び、京都奈良の風情を楽しんだが、故郷を訪れて大きく失望落胆したという。

故郷の里人としても代が変り、知人の姿もなく昔語りの相手もなくなっている現実が、落胆を助長する二因であったであろうが、前述した通りの良俗美点が失われて、何から何まで企業的思惑に彩られている姿に涙させられたのであろう。暫く温泉に静養して近くまた南米へ帰るという思いに、いたたまれない寂しい同胞の姿と見られたのである。

一老人は「富士山はあったが、日本人はいなかった。皮肉ではありませんよ、情ないがそんな気持です。長居は無用とばかり日本を去った小野田さんも、日本人は居なくなったとする一人でしょう」と述懐が感じられる一言を吐いた。

近代産業は、諸行無常の暴君でもある。都会人ベットタウン農山村に、高層アパートが林立し交通施設が普及する。食糧生産の場の農耕、仁術の場の湯治や医療、教育の場の学園、経営体はすべて企業体でなければならなくなった。収支採算は度外視される。

農耕風土の都市化は、純朴強調の美風を駆逐して、個人主義独善主義を流入し、質素節約を不合理として華美浪費を奨励する。今や農耕風土は、無情の風に吹きまくられゆく観なしとしない。土壌は企業資本に適さない。

変貌は変質を促す。海外同胞の里帰りが「故郷はなかった」と嘆くのは、人心の変質を指している。海外どころではない、僻か数ケ月の国内出稼ぎ者も、それに気付く情勢となりつつある。

阿蒙少言

世は挙げてピーナツ事件に沸騰している。会ったことはない、記憶にない、全く知らないなど、平気で嘘を連発する。これが大会社の幹部や政府の高官だから驚く。彼等が時折口にする「国家社会のため」は、空疎な鼻唄にひとしい。○高校生の教育問題審議で、道徳教育の強化が議題の一項目に必ず登場、怪しげな政治屋役人らが列べる結構なお題目を高校生らは何と視る。新聞の時事寸言に「ウソツキ、末は社長か高官か」の新格言が痛撃していた。○思想家としても知られたスエーデンのシカール王が「正義よりも基督教を愛する者は、基督教よりも教会を愛する人である。基督教よりも教会を愛する人は、教会よりも自身を愛する者である」と、深刻な苦言を遺した。ピーナツを喰って平気でウソをつく。その口が正義とか国益とかを説けば、まさに盗人猛々しい厚顔の極み。○国家意識はゼロ。徒党依存だけが旺盛、政治屋・教育・医療の各界が、大戦に匹敵した数百万の同胞の犠牲のあとに体得した信条とあっては、昭和年代は長くても哀しき時代の悔いを残そう。国家社会の利益よりも徒党派閥の利、それはカール王の警句の流儀に従えば、党派のためよりも自己のためである。この傾向は益々増大してゆく。○近年の民主々義日本の誕生は、敗戦のどん底に喘ぐ国下に煎将が産婆役となった新憲法に始まる。不信不安・破壊混沌の場句、またまた外国人によって社会安定を願ってよいものか。紅毛船は福音か。（白雲）

第二回 宗像大社歌会詠草
毎月一日〆切　詠草到着順

宮田　片山　朝子
公園に少女がひとり高々とブランコこぎいし夕光の中

福岡市　林　まつえ
雲の懸高黒部の秘境と座しながら自然のアルバムを感謝しつつ見る

逗子市　石松や寿子
般若湾の危難を機智に避けましし、唐橿に親王の姿しのばる

田島　吉武　武雄
蟻の旅行き交うことに話合ひ大きな餌引き行列続く

田熊　鷲津かつ代
夢の中にわが追ひしは何ならむさめたる今をしきりに思ふ

田熊　吉田　直志
山の駅ホームの花壇山百合の一本かよはそよと風に揺れる

宮田　片山　一
一輪車押して歩めば舗装路に影は短か し初夏の一時

武丸　原田　リノ
朝乾し洗濯物に差す日さし確かになりて梅雨明くるらし

曲　天野トモエ
蝉の声ひねりかとも聞えくる数寄屋の茶席の名残り

愛知県　野崎　傅三
こしまなる浄瞰照らすみ灯明の灯影しらみて神どりの鳴く

原町　八波　五月
我が育児無き子無きと聞き居しに育て子のありて泣きつく清拭め

東郷　藤崎　辰子
旅に見て常は忘るる石仏が眠れぬ夜の闇に顔ちらる

鐘崎　村田　四郎
夏さかり長きひと日の漁おえてかへる船先に力モメ舞いをり

武丸　原田まつ代
釣川の岸の青草吹く風にさゞ波立つを車窓に見つつ

津屋崎　古部　由久
いづこにかタ立したるらし出でて見れば虹の橋二重にかかりたる見ゆ

深田　中野　節子
あっはなる木の根そのまま段をなす苟溜孫山の長き坂登る

福岡市　江崎　琴子
梅雨明けて風さわやかに空青く庭の木立に幼蝉の鳴く

福間　廣渡一寸毛
喰ふみに追われし終戦の思い出も変る世相に忘れて行く

田久　小方　実
人の歌の載りし新聞の切り抜きをポケットに朝の畑にいでたり

吉武　白木うめの
玄関に水を打ち客待つ料理屋のいけ簀に鯉は生かされてをり

名残　竹原　圓
月毎に出す詠草のメ切日おくれがちなり老いの兆しか

田熊　今村　重刀
台風もとなく過ぎし今朝の寂静まりかえり山百合赤し

田熊　力丸　一郎
雲の上に高きあたり神います石槌山頂心あらわる

田久　立花　勇雄
伊豆観光の旅より帰りて間もなきに下田の街の豪雨禍きけり

福間　松尾　豊
大型車路上に出会いてお互に会図なしつつをら通れり

東郷　田中　春子
水蓮の隙に緋鯉のひそみ行く後に波紋のゆるく拡がる

阿蘇　花田　寿子
十余年ペットの外に働き得ぬわれにも孫の四人となりぬ

城南ケ丘　仰木　亀代
風化せじ一まん犬の前いきかへり宮居の鈴をさわやかに振る

福岡　吉田　信夫
碧眼の陶工眉は涼しくて日語たくみに楽しさを語る

津屋崎　麦野　時雄
夏さ中扇風機の涼楽しみつつ高校野球の戦況を見る

海の正倉院沖ノ島 磯釣り問題について（その三）

ここに於て当社は、〃沖ノ島瀬渡し禁止〃を対外的に表明することに決定し、十二月十日、宗海分発第一〇号をもって「当社所有沖ノ島保全につき御協力要請の件」を筑前海区漁業調整委員会、福岡海上保安部、大島村教育委員会に「沖ノ島遊漁、瀬渡し磯釣り遊山等禁止決定について御協力要請の件」を筑共第一三号共同漁業権管理者へ、また福岡県釣団体協議会及び各遊漁船には次の文書を送付した。

「沖ノ島瀬渡し遊漁者及び磯釣り遊山の禁止についてのおしらせ」

皆様方は標記の件について去る昭和五十年七月福岡県漁場利用調整協議会々長岩川勲殿を経由して、瀬渡し業務存続の陳情書を提出されましたが、その后当社並に各関係機関及び各種関係団体と種々慎重に協議検討致しました結果、次の理由により、当社の無許可来島者は一切上陸を禁止する事に決定しました。

つきましては、今后遊漁瀬渡し磯釣遊山等を目的とした人々は一切上陸させせないよう御願い致します。

理由。各種報道機関が報道の通り近年磯釣り遊山等の来島者が急増しています。そのため事故も多発し同島勤務の神職は境域の神聖護持ができなくなりました。

また国が指定した天然記念物、史蹟、鳥獣保護区はこれらの人々によって荒廃する恐れがありますそのため各位の御協力を切に御願いしますと共に関係同業者の方々に御知らせ願います。

尚、沖ノ島は左記の通り各種の法律による保護を受けています。法に違反しますと処罰されることもありますので念のため申し添えます。（以下要点のみ記す）

記

1、宗教法人法（全島神域）
2、史蹟名勝天然記念物保存法（沖ノ島原生林）
3、文化財保護法（全島史蹟）
4、全右（特別天然記念物カンムリウミスズメ）
5、鳥獣保護及び狩猟に関する法律

かくして、昭和五十一年に入るや一月中旬頃より遊漁船の来島は再び活発となり、一月十三日、十六日、十九日と釣人の上陸を告げる通報が奉仕神職よりもたらされた

この報告をうけ当社では、一月二十八日、関係諸官庁（福岡海上保安部、宗像警察署、福岡県文化課同水産局漁政課、同漁港課、大島村教育委員会）に出席方を依頼し祈願殿会議室に於て「沖ノ島磯釣問題に関する対策協議会」を開催しその結果、遊漁船により磯釣のため来島した旨の確認書をとり、島内の磯に上陸禁止の制札をたてることに決定し、二月より実施するはこびとなった。

またこの間、現地沖ノ島に於ては、折から鰤漁の最盛期とあって、大島鐘崎の出漁船団を始め玄海灘沿岸の各船団で連日五百隻に近い船が操業し、釣人との間にトラブルが頻発していた。

氏子評議員会開催

盛夏の去る七月九日午前十一時から当大社斎館に於て、昭和五十一年度の夏の大祓式、夏季大祭・人形及献納袋配布並取まとめ方依頼、昭和五十年度宗像大社氏子会会費決算報告、等について氏子評議員会を開催し、種々検討審議された。

当日は立石氏子会長以下三十二名に地元田島校区総代過半数、神社側から葦津宮司以下七名の職員が出席、定刻通り開催された。

まず立石氏子会長挨拶、葦津宮司が当面の社務現況について説明があり、養父祢宜の進行により当日の議題に入り、了承若しくは承認がなされ、終始、前向きの活溌な意見の交換があり有意義であった。最初に昭和五十年度氏子会々費歳入・歳出決算報告書が読み上げられ、去る五月十五日に行われた会計監査報告発表が黒石雅資監査員からあり承認された。続いて儀式課より夏季大祭の日程が読み上げられ、大祓の意義について説明があり、同時に人形並献納袋配布・取まとめ方の依頼があった。受取り日程等について係職員より説明が加えられ議題を終了した。会議終了後同席上に於いて昼食をなし、和やな雰囲気の中に午后二時過ぎ散会した。

!!交通安全祈願祭!!
―スズキゼミニ・一二〇台―

七月三十一日午前十一時、当大社祈願殿前大駐車場にスズキ自動車販売福岡㈱（社長鈴木忠）取扱車種、スズキゼミ二軽トラック一四〇台の交通安全清祓が斎行された。この祭典は同社が、福岡クボタ㈱（社長、大橋松雄）との間にレンタル契約を結び引渡式を兼ねて行なわれたものである。去る、五月にも福岡ダイハツ㈱が一八〇台の納車をしており今回と合せ三二〇台もの車が当大社に於いて安全祈願祭を行なったことになる。

式典には両社の代表者をはじめ関係者、並にクボタ機材を扱う県内各地の会社、商店、農協等より代表者一五〇余名が参集し祈願殿に於いて交通安全、業務繁栄祈願祭を行い引続き納車地区別に整列している車の清祓を行なった。

当日は未明より大型キャリアカーで黄と青のツートンカラーのクボタ各社の車が次々に大駐車場に運び込まれ、またたく間に同一車種の車で半分以上がうまった。この車を三名の神職で清祓するのに三十分を要する程であった。この日は丁度、夏季大祭、夏越祭の日に当り境内に於ては一般参拝の車も多く「さすがはクボタだ」と感心していた。この車は式典終了后一斉に県内各地へ配車のため帰途についた。

この為神社から東郷橋までの県道四キロは時ならぬクボタの車の行進となった。

福岡クボタでは、無線装置が各車取付けられており、今後キメ細いサービス業務の業務の向上が期待できますと語っている。

最後に両社の益々の発展と車の安全を祈念申し上げます。

外遊雑話　猫も杓子も (16)
ドゴール製ポリス

世界のいかなる民族も、その文化的優劣には関係なく、独自の酒類と信仰を持たぬものはないと云う。酒はとも角、信仰は宗教的生命を今日に伝えてをり、歴史的遺産としても寺院はじめ像型絵画などが残されている。欧州数ケ国どこへ行っても同じである。

それほど人類は神恵と平和と繁栄を願いながら、よくも残酷な戦禍を繰り返したものだ。観光ルートに入る多くの宗教施設、泰平祈念の法灯はゆらいでいた。同時に旧跡名所の案内書は、抗争殺戮の傷あとを説いていた。

パリも勿論例外ではない。それところか、ここは前述したように革命の本場である。然し、ガイドの話には栄光のフランス革命はあまり登場しない。ルイ王朝に関係ある宮殿や広場が、見物対象に多い理由もあって、王朝政治の長短などが挙げられる。

王朝政治の崩壊、共和制の発足の記念とも言われるエッフェル塔は、パリ名物の一つである。ルーブル美術館の庭に休んで、半句先生も学生数名に交ってガイドの話を聞いたが、意外な感のあるのはこの塔がパリッ児にあまり評判のよくないことであった。

一八八九年に、フランス大革命百周年の記念事業として、万国博が開催された。その時は共和制を獲得して十余年後で、特にパリッ児は熱狂的に力を入れ、これに登場した巨大なモニュメントがエッフェル塔であった。四本足の巨体が完成し塔上にフランス国旗が掲げられた時、設計者のエッフェルが、千フイートの旗竿を持っているのはフランスだけだ、と叫んで鉄骨構造の権威を誇示したところから、塔の名となって今日に及んでいる。だが、パリの美観を損ねるとの意見も強く、この巨大な旗竿は取壊しの予定になったが、アンテナ塔として利用されて助かった。観光バスのコースには入っていなかった。

セーヌ河遊覧船は、エッフェル塔のすぐ近くの河畔から出発するとの案内があったが、滞在中にセーヌ河で遊んだ学生はなかったようで、半句先生もやめた。

市内には、何々広場と銘打った塔もある。凱施門もパリを象徴する戦争遺物だが、バスチーユ広場は大革命の発端を告げた監獄破壊の歴史的意義を持つ。監獄のあった場所は、地面に黒線をもって革命の基点を表示している。

ロビスピエール、マラー、ダントン等の往年のバスチーユ獄襲撃の熱血漢をはじめ、政治犯等の遺骨が塔の下に眠っている。現在の大総領ジスカールデスタンは、政治外交に活躍して評判がよいそうだが、パリ駐在の日本商社マンが半句先生等に語ったその前のドゴール大総領のワンマン的政治に興味があった。

その中でも、ドゴール制ポリスは異色である。十年前フランスでは失業者が多く、その対策に内政の苦慮が変った事態を生んだ。その一つがドゴール製ポリスと皮肉られる交通警察官である。

円形の広場に集る車は、二三度回転を繰り返しつつ所望の通路へ走るチャンスを捕えると離脱し、四散する動きは目まぐるしい。そこに立つ失業救済のため生れた警察官、以前は裏街を遊び歩いた青年だけあって、戦場のような離合集散の修羅場を見守る緊張感がないそうで苦笑を誘う。

若い女性でも近くを歩いていようものなら、やたらに口笛を吹く。時に茶目気のある女が手でもあげると夢中になって気を取られ、遂に車の動きは混乱する。と、いつの間にか姿を消す。ドゴール製は実にひどい無責任ぶりですよと、説明者がこきおろす。

「さすがはパリです。粗末な中古車などは安物のはきもの同然で、車庫に入らぬ多くが街路にギッシリ駐車し、その中の一台が出ようとしても抜けられない。前後の車にぶち当てて間隙を作り、何の不都合も感じないで出て行く。前後の車もぶち当たりで損傷もありましょうが、その持主が近くで見ていても文句を言いませんよ」と、街の消耗品を語った。

日本なら、持ち主がタバコを吸いながら、笑って自分の車がいたむのを眺めている風景はあり得ない。物質欲にからむ権利主張の著しく向上（?）した現代日本、抗議から賠償と喧しい。訴訟・人権・闘争・金銭そこには何のゆとりも人間味もない。やがて法廷が足らなくなる日がくるか。

（風来子）

神の湊（こうのみなと） (60)

楠　早鳥　作
福田　長庵　画

京へ　その五

船は難波江に入った。後世の大阪である。大阪という名称は、おそらく大江坂の略であろうといわれる、大江は難波江の異名で古歌にもでてくる摂州東生玉郡生玉の庄内の大阪で谷町や坂町と同列であったのが、いつの間にか生玉の方がせまく、大阪の方が広くなったと言われている。東京の赤坂と一ツ木と同じで一ツ木村の中に赤坂という坂があったのが、今では逆に一ツ木通りになって残っているようなものである。また大阪と小ざと偏に書くのは明治に入ってからで、それまでは大坂と土偏で書かれていた、その名残りが大坂城である。古くより良港として名高く西海へ赴く船は凡てここを起点として出発した。

碇を下ろすと物売りの小舟が集って来た。中に琵琶法師をのせた舟がいた、法師の名を阿斎と言い近在にない名手という。明継は白楽天の琵琶行の故事を想いだしてか、船中に招き入れ一曲所望した弦月は中天にかかり船べりを打つ波の音はもの憂い、琵琶の音は、時に弾々時に湿々、嫋々、切々として語りつがれる詞のはに明継は頭をたれて聞き入った。平家物語逆櫓の章を阿斎は語った。

「元暦二年二月三日、九郎大夫判官義経、都を立って摂津国渡辺（現在の浪波区附近）より船揃いして、八嶋へすでに寄せんとす。三河守範頼も同日に都を立って、山陽道へ赴かんとす、（中略）同十六日、渡辺、神崎両所にて、この日頃揃えける舟ども纜すでに解かんとす。折節、北風木を折って烈しう吹きければ、大浪に舟ども、さんざん打ち損ぜられて、出すに及ばず。修理のためその日は止まる。渡辺には大名小名より合いて、〃そもそも舟戦さの様は、未だ調練せず。いかがあるべき〃と評定す。梶原申しけるは、今度の合戦には〃舟に逆櫓をたて候ばや〃判官〃さかろとは何ぞ〃梶原〃馬は駆けんと思えば、弓手にも馬手へも廻しやすし、舟を屹と押し戻すが大事に候。艫舳に櫓を立て違え、脇楫を入れて、どなたへも、安う押すようにし候ばや〃と申されければ、判官の給いけるは〃戦さというものは、ひと引きも引かじと思うだにも、あわい悪しければ引くは常の習いなり。もとより逃げ設けしては何のよかろうぞ。まず門出の悪しさよ逆櫓を立てうとも、返え様櫓を立てうとも、殿原の船には百梃千梃も立て給え、義経は元の櫓で候わん〃と給えば、梶原申しけるは〃よき大将軍と申すは、駆くべき処をば駆け、引くべき処をば引いて、身を全うして敵を亡ぼすを以って、よき大将軍とはする候。片趣きなるをば、猪のしし武者とて良きにはせず〃と申せば、判官〃猪のしし鹿のししは知らず。戦さは唯、平攻めに攻めて勝ったるぞ心地はよき〃との給えば、侍ども恐れて高くは笑わねど、目ひき鼻ひき、きらめきあえり。判官と梶原と、すでに同士戦さあるべしとささめきあえりー」

阿斎は、語りおえばちをおさめて低頭した。

「京へ上るに、何よりの馳走であった、礼を言うぞ」

法外な謝礼を手にして阿斎は船をおりた。その盲人にしては巧みな身のこなしを見て、明継の瞳にふと、不審の影がよぎった。

朝はやく、船は淀川をさかのぼった。移り行く両岸の風景を眺めながら明継は〈駆くべきところは駆け、引くべきところをば引いて身を全うして敵を亡ぼすを以ってよき大将軍とはする候〉と唱えるように口にした。

長柄をへて、江口まできて船をおりた。小舟ならば木津川との合流点の山崎まで上り陸にあがっていたが、この船では江口が限度であった。宰領が種々の手配をするのを側に明継は流れ行く淀川の河面をみて

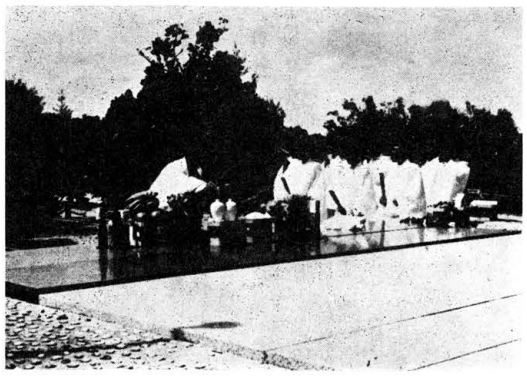
〈時により逆櫓も必要〉とつぶやいた。

荷駄の隊伍を整え、騎乗し〃出発〃の号令を発しようとしたとき轡をとっていた小者が、〃あれを〃というような身ぶりで川下の方を指さした。何事ぞといぶかしく思い振り向くと、軽舟が一隻矢のような速さで溯ってくるのが目にうつった。舟の舳先に男が一人立ちあがり此方の動きを制止しているように見うけられた。

〃女が乗っている!〃なるほど被衣をかぶった女の姿も見える。馬をおり床几にかけて待つと、ほどなく舟は岸に着き女人が降りてきた、荷駄の男たちの間から〃ほう〃と声があがった。近づいた女の顔を見て明継も驚いた。長府の弥太の邸で会った碧眼の女人であった。

福岡青年神道会

沖縄戦没者慰霊祭に参加して



月日がたつのは速いもので、今年昭和五十一年は、大東亜戦争終結三十周年の年である。昭和も半世紀をすぎ、この三十年の歳月を振りかえると国民一人々々の胸中には様々な感懐が去来することであろう。

あれだけ荒廃した都市が農漁村も無事了え、全日空二二便（午前九時発）にて空港を飛び立った。昨日来のぐづついた天気も、快復し、清々しい朝を向えた。

九州本土を離れる頃には、より一層の好天となり、雲一つない快晴となった。上空より見下す海の色は、彩やかな緑さで、サンゴ礁の岩礁により出きた島々が点在して、一幅の水彩画をみるようであった。

滞空時間半、午前十時三十五分に沖縄那覇国際空港到着、空港に降り立つた、午前中というのにもう気温三十度、湿度八〇パーセントという、自然の大歓迎をうけ、一同「フーッ・アッー」と声にもならないため息をついた。

各自荷物をうけとるや、タクシーに分乗し、沖縄県護国神社へと向う。車で二〇分左右にビロウ樹をはじめとする亜熱帯植物と、米軍基地をみながら、小高い奥武山公園の中にある護国神社に到着。

奥武山公園は、昭和四十八年五月沖縄本土復帰記念「若夏国体」の開催地で現在「平和公園」として県民にしたしまれている。

全員威儀を正し、神前に額づく沖縄全英霊に魂安かれと念じ玉串をささげた。

（以下次号につづく）

【写真】　献饌の儀を行う祭員

話題の新車をみる（六）

スズキ・フロンテ7ーSの巻

周知の通り、軽自動車は国土の交通事情に合った日本独特のクルマである。その種々の経済的特典により、昭和四十年代には爆発的普及を遂げて大きく社会に貢献してきた。ところが、生活水準の向上や車社会の進展につれ、安全性の問題が一はやく世界的な関心となり、排気害が叫ばれるにおよんで、ワク内で条件を充たすことがむずかしくなってきた。

そして第二種軽自動車論が唱えられ、かつオイルショックによる省エネルギーが叫ばれて軽自動車の再認識・再登場となった。

車検制度実施等で特典の有難味が薄れているが、そのメリットは大きいゆえに、運輸省は軽自動車の低公害化促進と省資源を考えた車造りを達成させるために、昨年九月新規格を告示（左記）、本年一月から施行された。

（全長）三〇〇〇㍉→三二〇〇㍉
（全幅）一三〇〇㍉→一四〇〇㍉
（全高）従前同様の二〇〇〇㍉
（排気量）三六〇㏄→五五〇㏄

扨て、これまで発売されたものとして、新規格第一号は三菱「ミニカ5シリーズ（四月二日発表）、富士重工「スバル・レックス5シリーズ」（四月二十七日）ダイハツ「フェローMAX550シリーズ」（五月十日）、そして今回紹介する鈴木自動車「スズキ・フロンテ7ーSシリーズ」（六月四日）などが乗用車としてあげられる。

スズキの乗用車は現在（軽）の分野のみを扱っているが、この「スズキ・フロンテ7ーS」は同社初の新規格乗用車で、既発売の新規格軽商用車「スズキ・キャリイ五五」「スズキ・ジムニー五五」の五三九㏄エンジンより小柄な四四三㏄エンジンを搭載している。

従来のフロンテをベースに、全高一九五、全幅一〇〇、トレッド（前）一〇〇、（後）一〇五㍉と車体を拡大・また前後に強力なバンパーを採用し、三点式シートベルトの前席標準化し、居住性の拡大と走行安定性の向上をはかっているため、運転操作にゆとりが生まれ長時間の運転にも疲労の負担を少なくし且つ安全性を増した。

前後のスタイリングは洗練され、とくにフロントマクは従来の個性的なデザインから正統派なものへと変化、ラジェーター・グリル下のモールを兼用していたバンパーは一般的な薄板のものに変更、これによりターニングナルは下部に移行している。

テール部については、後部ランプが大きくなり、又埋め込み式のバンパーは一般的なバンパーに変わった。

搭載エンジンは新規格唯一の2サイクル三気筒（ボアxストローク五六㍉）のオーバースケアで昭和四二年五月発売のフロンテ三六〇用、三六五㏄エンジンを土台に、最高出力二六ps／五〇〇〇RPM、最大トルク四、七kg-m／三五〇〇RPM、圧縮比八、〇と従来の二六ps／五〇〇〇RPM、三六kg-m／四〇〇〇RPM、圧縮比八、五の三六六㏄エンジンよりもフラットなエンジン特性をもち運転もラクになり多いに活躍が期待される。

白熱戦展開さる

筑前地区中学校相撲大会

猛暑の七月三十一日、午前九時より宗像大社相撲場にて第五回筑前地区中学校相撲大会が盛大に開催され各校代表選手（約百五十名）が暑さにも負けず白熱戦を展開し、やんやの喝采を浴びた。以下は当日の成績である。

団体の部

一位　城山中学校
二位　津屋崎中学校
三位　玄海中学校・大島中学校

個人の部

【一年】
一位　永島美信（津）
二位　佐藤隆二（大）
三位　楠木　及（玄）
〃　花田英雄（津）

【二年】
一位　遠藤健一（大）
二位　篠崎正志（津）
三位　木村利勝（津）
〃　坂本一宏（中）

【三年】
一位　高山　勲（津）
二位　遠藤剛一（大）
三位　大和　豊（城）
〃　永島隆美（玄）

第五回宗像大社献詠短歌大会開催について

謹啓　初秋の候貴家益々御清祥の段お慶び申しげます。扨て　本年も第五回大会を開催致しますので参加下さいますようご案内申し上げます。

昭和五十一年八月吉日

主催　宗像大社歌会
後援　毎日新聞社

一、期　日　昭和五十一年十一月十一日（木曜日）
　　午前十時開始
二、会　場　宗像大社清明殿
※募集要項
一、メ切期日　昭和五十一年九月十五日必着
二、詠　草　一人一首　未発表の作品を原稿用紙に横書で明記（住所氏名を付記の事）
三、選　者　辻裏茂　山中茂樹　老川潮　久原喜衛門　田口白汀　持田勝穂　手島一路　赤星端　佐野とき江　仰木実　の各先生
四、会　費　五〇〇円（献詠送付の折、定額小為替、又は切手にて納入、後日詠草集を送ります）
五、賞　選者賞三名、互選賞五名、佳作入選十名
　（但し当日出席者にかぎる）
六、送付先　〒八一一-三五　福岡県宗像郡玄海町田島　宗像大社社務本局内　献詠短歌大会係宛

社務日誌抄

七月五日　浦安舞温習（九日まで）
七月七日　出光徳山製油所々長水野氏外四名参拝
七月九日　氏子評議員会、清明殿
七月十日　出光徳山製油所副所長外六名参拝
七月十一日　菊花会会議、斎館
七月十二日　宗社会宮司会、勅使館
九州産業大学百名参拝
七月十四日　県観光課十四名参拝
七月十五日　月次祭
祇園祭、
職員会議、会議室
七月十六日　NHK教育テレビ、宝物撮影
玄海町成人学級（菊）
七月十七日　野鳥の会懇談会、斎館
出光三光会四十名参拝
七月十九日　福岡高等検察庁他参拝
七月二十二日　献詠短歌大会打合会、斎館
定例歌会、斎館、
神青会総会出席、県神社庁
七月二十四日　第七管区海上保安部次長外二名参拝
七月二十六日　七夕揮毫会、中津宮
七月二十九日　吉備津神社職員三名参拝
七月三十一日　大祓式、夏越祭、午後五時
筑前地区中学校相撲大会、
宗像商工会青年部九名神津宮清掃奉仕、
福岡クボタ交通安全祈願祭並
新車引渡式
八月一日　夏季大祭第一日祭
八月二日　夏季大祭第二日祭

瀛津嶋防人日記（7）

(32)向さくる山にあるべし大王（おほきみ）の宣家（みやけ）となり七国の国は

向きのはっきりしない山でまあ大きいからよいようなものであるが、天皇の遠い官府である百済の国は。

「向さくる」は、どの辞書にもないようである。「さくる」は仲間である。遠くを見やるなどの意があるが、どうも「向」にうまくつながらない。また「さくる」と洲って読んでも、さが求めるなどの意でやはりぐあいがよくない。しばらく前記のように訳しておく。大方のご教示を願いたい。「大王の宣家」は、いわゆる「遠の朝廷（みかど）」にて、百済には天皇の官府が置かれていた。「百済の国」は前に述べた。この歌の「向さくる」を理解する手がかりがつかめばしないかと思って「大王の遠の朝廷」という句のある万葉の歌八つについてしらべて見たが無駄であった。日記による旧暦の七月二日は眉のように朝鮮の山が見えたいうから、以下の三首はそれに触発されて、百済・新羅・高麗という朝鮮の三国のことを思いつかべて、いやしんで詠んだものであろう。やはりこれも作者の教養のあらわれであろうが、日本を神国として尊び、外国をおとしめるのは、この随宣長に習うところもあろうか。

(33)国津物さはにまつりて御馬飼の部に仕へ新羅の国はや

国産物をたくさん奉って、日本の朝廷の牧夫として仕えたのである。新羅の国は。

「国津物」は国産物、「御馬飼の部」の「部」はウカサともむの部で、ここもミウマカヒツカサと読むべきであろう。大和朝廷に仕えた帰化人の牧夫のこと。日記の歌で万葉の類句が一つもないのは、この歌と、(42)(45)の三つだけである。

(34)ことさへく高麗のくにしも天皇（すめろぎ）の奴（やっこ）となりてつかまつりし

高麗の国の大王も日本の天皇のしもべとなって仕えまつった。

「ことさへく」は、枕詞。「ことさへく」は、山松谷をその隣（あはれ）とぞ思ふ独しあれは

荒磯の曲折した所に立っている松からである。

ひとりであるから。

「荒磯廻」は、荒磯の曲折した所。この歌は金崎という山のみねに沖の島ではただ一本しかない松が立っているのを見て、それに独身者である作者自身の心を投影して詠んだものである。足軽という低い身分でありながら、当時一流の国学者であった作者は、学だけを恋人とする孤独な人であったから知れないが、この歌はそれほど深刻に考えて味わう必要もあるまい。ただ若い独身の作者の感傷の一つであったことだけはたしかであろう。

(36)からくにを詫（わび）てしこいによる逆子（さかご）の網手やひとりうきねすらし

朝鮮をつらいことに思って、ここに流れ寄ってきている浮子（うき）として網についている韓竹（からだけ）はまあ、ひとりで浮寝をするらしい。

「からくに」は、朝鮮または中国を呼ぶ言葉であったが、両国や、さらに広く外国をもさういった。ここは朝鮮ととるべきかもしれない。「詫て」は、つらく思って。「逆子」は浮子（うき）。「うきね」は、水に浮んだまま寝ることである。この歌は西の方から大きな韓竹（くれたけ）が漂流して来たのを見て、それは本の方に穴があるので網のうきにつかったものらしいと思って詠んだのである。このような隠人的なうたい方も、万葉の歌の型の一つであるから、作者はそれを学んだのであろう。

(37)かつき得てわれに得しめよ大海の水底照しつく白玉

水にくぐって手に入れて、自分にくれよ。大海の水底を照らして沈んでいる白玉を。

「かつき得て」は、「かづき得て」で、水にくぐって手に入れての意。「しつく白玉」は沈んでいる白い玉。「白玉」は白い美しい玉のことであるが、ここは鰒（あわび）の中にある真珠をさす。この歌は漁師が水にくぐって、あわびをとっているのを見ての作であるから、類歌には「大海の水底照らしつく玉いはひて取らむ風な吹きそね」（巻七・三一九）「水底にしつく白玉ゆゑに心つくして我が思はなくに」巻七・三二〇）などがある。

(35)荒磯廻（ありそみ）に立る

大海の水底照しつく白玉

九州大谷短期大学教授
中村行利

宗像大社歌会 俳句作品集（二六三）

福　間　広渡一寸毛
神苑の若葉に清し緋の袴

田　島　吉武　武雄
七夕に今宵一度の逢瀬かな

福　間　上野　義夫
鯉はねて夏樹蔭揺る神の池

土　穴　八尋　恒夫
椎若松ベンチに掛けた老の杖

津屋崎　井浦　良介
軽き音楽屋上に咲くビールの泡

田　熊　安部　ゆき
語り合ふ遠き歳月夏座敷

田　熊　力丸　一郎
世の中は頓に騒し蝉の声

宗　像　岡田　無名（ムメ）
ネオンの灯水にうつりしボート槽ぐ

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦

―出光佐三の事業理念―

第七章　ペルシャ湾の日章旗

燃える砂漠への使者

イランが国有化を宣言する直前には、確認埋蔵量百三十億バーレル、一日当り出油量最大七十三万一千バーレル、原油処理能力はアバダン、ケルマンシャー両製油所を合わせ一日当たり五十万二千三百バーレルに達していた。

とりわけアバダン製油所は、処理能力五十万バーレル、従業員約七万人という世界最大の規模だった。当時のわが国の処理能力は、合計十二万バーレルにすぎなかった。

イラン政府とアングロ・イラニアン石油との関係が悪化し始めたのは、一九四九年（昭和二十四年）からである。

第二次世界大戦後の民族主義、国家主義の高まりの中で、鉱区協定、利権協定の改定交渉が行なわれた。

当時、アングロ・イラニアン石油は、創業者ダーシーいらい約半世紀の間に投資した額の四百倍もの利益をあげていた。それでいて、イランに払う利権料はトン当たり一ドル五十セントにすぎず、ベネズエラ、サウジアラビア、クウェートなどの四ドル台にくらべると、半分以下だった。

石油開発の歴史が古いだけに、協定内容も産油国にきわめて不利だったのである。

一九五一年（昭和二十六年）三月、クーデターによって首相ラズマラ将軍が暗殺され、モハメッド・モサデグ博士が政権を握ると、あっという間に石油事業の国有化法が成立した。七月にはアバダン製油所が接収され、九月には対英最後通告となり、英国人職員はひとり残らず追放された。

モサデグ政権は『アングロ・イラニアン石油の財産からの産物には、イランが法的所有権を持っている』との声明を発表した。

英国は驚き怒った。それでなくてさえ、戦後の『大英帝国』の斜陽化はいちじるしい。『イランよ、お前もか』という気持だったに違いない。

八月、両国政府間の会談を開いたがモサデグは譲らない。交渉は決裂し、英国はただちにヘーグの国際司法裁判所に提訴した。

アングロ・イラニアン石油は、国際石油カルテルの有力なメンバーである。カルテル各社は結束し、イラン国営石油への包囲網を固めた。イランからの石油買い入れはいっさいとりやめて、モサデグを『兵糧攻め』にしようというのである。

アングロ・イラニアン石油がイランに払う利権料は、全国庫収入の二割を上回っていた。また同社の石油輸出高は、全イランの輸出の四・五倍に当たる。モサデグは国有化を断行した場合でも、少なくとも利権料に相当する利益は、国営による生産、販売で確保しうる、と踏んでいたのであろう。

当時、イランの財政は窮乏していた。財政窮乏が、国有化のひとつの動機でもあった。国際カルテルはそこを突いた。モサデグにとって、いちばん痛いところである。

この点、モサデグの見通しに誤算があった。国際カルテルの絶大な支配力を、過小評価していた。

事実、国際カルテルにさからってまで、世界中のどの業者もアバダンに船を向けようとはしなかった。翌年七月、ヘーグ国際司法裁判所が『裁定の権限なし』と、英国の提訴を却下したあとでもそうだった。

ただひとつ、例外があった。この年の六月、イタリア船ローズメリー号が積み出そうとしたが、紅海の入り口のアデン港で英国海軍に拿（だ）捕されている。

モサデグはあせった。国有化したとき一千万キロリットルにのぼった原蔵石油が、一滴も世界市場に出せないのである。

結局、モサデグは二年後の一九五三年八月、軍部の離反にあい失脚する。

新首相ザヘディ将軍は、就任とともに『石油紛争の平和的解決』を声明、五四年八月にはアングロ・イラニアン石油を加えた八大石油会社（注、イランとの交渉のため四月にコンソーシアム＝国際合弁会社＝を結成した）との間に協定を結び、国有化に端を発した紛争は三年四カ月ぶりに落着するのである。

国際石油カルテルの包囲と英国海軍の脅威をハネ返し、二十八年になって堂々とイラン石油を買いつけたのは、日本の出光興産とイタリアのスポール石油（ブローカー）である。

英国がヘーグ国際司法裁判所で敗訴した二十七年七月以降、イラン国有石油の買い取りをめぐる国際ブローカーの動きが激しくなった。英・イ紛争によって世界的に石油が不足し、値上がりもいちじるしい。危険な仕事なのだが、成功すればボロもうけすることは確実だからである。

この前後から出光にもブローカーが盛んに接触を始め、日本の政府筋からも『輸入したらどうか』との示唆さえあった。

しかし、出光は動かなかった。

当時、出光はさきに述べたようにジョイント・ユース（石油輸入基地の共同使用）制によって、国際カルテルから圧迫され『十三対一』の苦しい戦いを続けていた。この戦いは、イラン石油の封鎖と朝鮮乱動による世界的な石油不足によって、いっそう条件が悪くなっていた。

『製品が欲しい』と、血の出るようなさけびをあげていたころである。イランの石油だって欲しいことに違いはない。

ちょうどこのころ、日章丸が竣工（二十六年十二月）している。ただちに北米航路に従事し高オクタン価ガソリンを輸入して『アポロ印』の名を高からしめたのはすでに述べたとおりだが、佐三も、これをイランに向けたい誘惑にかられたに違いない。

この間の佐三の考え方は、二十八年四月二日の支店長会議での説明に、いちばんよくあらわれている。

四月二日といえば、日章丸がアバダン港に向け、インド洋をひた走りに走っているころである。出光がイラン石油を輸入しようとしていることは、まだ日本の政府も業界も新聞も、まして英国も知らない。全世界が驚くのは八日後のことである。

佐三は『今回、イラン国より石油製品を輸入することは、ビッグニュースであり、世界的反響を起こすことが予想される』と前置きし、わが国石油政策のあり方、出光の立場、輸入を決意した理由、などを詳細に説明している。

要約すると、つぎのようである。

一、『輸入は出光自身のためでなく、国家のためにやらなければならない』。なぜなら、石油を輸入し、産業を発展させ、輸出をふやすことが、わが国の経済発展の路線であり、そのためにはまずイランのように、豊富な資源をもっているところと直結する必要がある。

一、二十六年いらい、第三者からイラン石油の輸入をすすめられたが、これを拒みつづけてきた。『われわれは国策上は、この問題に積極的に入りたいのにかかわらず、これをなさなかったのは、出光の国際儀礼および商業道徳上の良心が許さなかった』からである。

一、急に輸入を決意したのは『イランの石油国有化は、すでに各方面に認められたと判断した』からである。

その理由は、つぎの四つの事実である。

（1）英、米両国の石油資本がイラン石油の共同販売会社を作り、イラン政府と交渉を進めている。これは、国有化の是認を前提とするものであり、残る問題はアングロ・イラニアン石油にたいする賠償だけとなった。

（2）米国務省が二十七年十二月『米国の商社、個人がイラン石油を買い取ることには反対しない。これは英国政府も了解ずみである。』との声明を発表した。

（3）二十八年三月、イタリア船ミリエラ号がイラン石油を積み出した。ベニスの裁判所は、これにたいするアングロ・イラニアン石油の仮処分申請を却下した。

（4）二十八年三月、モサデグ首相が全国民に放送、第一にイランは石油を販売する、第二にアングロ・イラニアン石油に賠償する用意がある、第三に英国との国交回復を望む、との態度を明らかにした。

このように説明したのち、佐三はつぎのようにつけ加えている。

『英、米の販売会社が熱心に検討されているおりから、日本としては一刻もおろそかにできない。日本政府の承認が得られるかどうか不明である。その他、金融界、海運界などにも種々な支障がある と思いやられる。そこで、出光の全責任においてイラン石油の輸入を決行し、石油政策の基礎を把握することにばく進した』

『出光の今回のできごとは、日本の石油政策を確立し、かつ日本の消費を合理化する。すなわち、産業立国に役立つため、石油業者としての使命を果たし、かつそれによって業界も繁栄することを期するものであって、国家百年の石油国策を樹てるものである。利権や事業の売却を目標とするものではない。

根本に相違のあることを知っておかねばならぬ』

わが国は戦後このときまで、イランから石油を輸入したことはなかった。中東からの輸入がいちばん多かったが、それはまだサウヂアラビアとクウェートに限られていた。

輸入を決断するまでには、イランの国情と国際情勢、英国とアングロ・イラニアン石油の動き、法的な根拠、わが国の政府、業界の反応などを分析し、予測する必要があった。

わが国はまだ、独立後わずか一年しかたっていず、国際関係にはとくに配慮しなければならない情勢にあった。出光の行為によって、日本を国際社会の中で孤立させることになってはならない。

また、出光自身にとっては、これは社運をかけた冒険だった。ペルシャ湾には英国の軍艦がおり、機雷も敷設されているだろう。撃沈されることはないにしても、拿（だ）捕、抑留のおそれはある。

決断するまで、佐三は悩みに悩んだ。

佐三が決意したのは、二十七年七、八月ころである。

直接のきっかけは、佐三自らが支店長会議で説明しているように、英、米両国の石油資本が買い取りの下交渉を進めている、との情報が入ったことである。

『英国や米国が買うのなら、日本の出光が買って悪いはずはなかろう』と佐三は考えた。

このあたりが被占領意識から抜けきれず、米、英、ソといった大国の顔色をうかがうことにきゅうきゅうとしていた政府、財界の大勢とは違うところである。毅然たる『日本人出光佐三』の面目がある。

情勢は急転回し始めた。ぐずぐずしていると、米、英の資本に先を越される恐れがある。とりわけ米国は、イランからの英国勢力の退潮に乗じ、どっと進出しようと虎視たんたんとしている。佐三は十一月、弟の計助専務と手島治雄常務（現在、顧問）をイランに派遣した。買い取り契約交渉のためである。

モサデグ首相は、質素な部屋でふたりを迎え、開口一番こういった。

『これまで、契約交渉にきた会社は二十ちかくもある。だが、実際に石油を積み取りにきたのはひとつもない』

国有化宣言いらい一年半、首相は国際カルテルの妨害作戦が骨身にこたえている。『出光もその仲間だろう。どうせ、船は回せないのだろう』というのである。

ふたりは説明した。国際カルテルに従属しない出光の立場、人間本位の経営と大地域小売り業の方針、確実な販路、などのことである。

モサデグは完全に了解した。『よろしい。それなら来年三月までに船を回してくれ』

出光は二十八年二月、イラン国有石油会社との間に石油売買の基本契約、および補足協定を正式に締結した。

われ俯仰天地に恥じず

二十八年三月二十三日、日章丸は春の陽を浴びて、静かに一万八千トンの巨体を横たえていた。出光興産神戸油槽所の桟橋である。

スカイ・ブルーの優雅な船体、朝風にはためく船尾の日章旗が美しい。かって若き日の佐三が、日田重太郎とともに歩いた摩耶、六甲の山なみが遠くにかすんでいた。

しばしのわかれを惜しむ乗組員、家族たちの間を抜けて、佐三は一本の白羽の矢を手に、ひとりタラップをのぼりブリッジに向った。そこには宗像神社が奉祀してある。佐三は矢をささげ、瞑黙した。長い祈りであった。

やがて、かたわらの新田辰男船長をかえりみ、密封した袋を渡して言った。

『船がアラビアを過ぎイランに向かったら、この袋を開き、ガリ版の刷りものを船長に渡してもらいたい』

船長はうなづき、佐三は船を下りた。

『出港用意』が号令され、船はタグボートにひかれてゆっくりと桟橋をはなれた。五色のテープが散った。船はしだいに速力をまし、やがて港外に姿を消した。

祈るように桟橋に立ちつくした佐三は、はっとわれにかえった。見送りの家族たちは帰り、残っているのはたったひとりだけだった。早春の潮風がえりもとに冷たかった。

矢は放たれた。

日章丸は一路南下した。台湾の南、バシー海峡から南シナ海に入り、シンガポール沖をかすめてマラッカ海峡を抜けた。シンガポールを通過するとき、英国の海軍基地から船籍、船名と目的地を聞かれて肝を冷やした。

四月五日コロンボ沖にさしかかったとき、東京の本社から電報が入った。

『航路変更、アバダンに向かわれたし』

新田船長は全員に集合を命じ、佐三から渡された袋を開いた。ガリ版刷りの紙をひとりひとりに配り、大声で読みあげた。

それには、こう書かれていた。

（つづく）

児童の遊戯・玩具

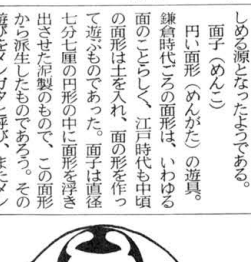
八月の六日と九日は、広島、長崎の原爆記念日である。灼熱の閃光が走ったと同時に市街地は焼け野原になり、数十万の人が命を絶ち負傷を負った。人類として忘れられない日である。その時の被爆者が、三十年にもなろうという今日、なおもって原爆症で命を落しております。二度と戦争の悲惨をくりかえさないよう、国民一人一人が各自の胸に銘記しよう。

竹馬（たけうま）

竹を馬にして小児の乗り遊んだことから始められた遊具。現在の竹馬は、二本の竹に横木を結いつけ、それに足を踏みかけ、竹の上端を握って二本の杖のようにはこぶもので、地方によっては、高馬（たかうま）とか、高足（たかあし）とか、鷺足（さぎあし）とか呼んでいるが、これは室町時代に発達したもので、平安時代に発生した竹馬とは違う工夫であると考えられている。二条・六条・高倉三朝に仕えた歌人の藤原清輔の「袋草子」雑談の条に見える「千生忠見幼童の時、内裏より召あり、竹馬に乗りてまいる」という竹馬は、葉の付いた一本の生竹にまたがり、竹に結んだ綱を手綱にしたものや、西行法師の歌に「竹馬を杖にも今はたのむかな童あそびをおもひいでつつ」とあるのが、平安時代発生の竹馬で、鎌倉時代にできた「法然上人行状絵詞」に描かれているので、その姿を見ることができる。室町時代の「福富草紙」に挿入してある木製二本足の高足は、田楽などに使用された鷺足などと共に、竹製のものの方が節を揃えて足駄にするのに便利なところから、室町時代の工夫が、小児遊具の現在の竹馬を生ぜしめる源となったようである。

面子（めんこ）

円い面形（めんがた）の遊具。鎌倉時代ごろの面形は、いわゆる面のことらしく、江戸時代も中頃の面形は土を入れ、面の形を作って遊ぶものであった。面子は直径七分七厘の円形の中に面形を浮き出させた泥製のもので、この面形から派生したものであろう。その遊びをメンガタと呼び、またメンコとも呼んだ。この面子は、後には鉛製のもの、木製のもの、また厚紙を用いなどし、別に、面子絵といわれるものが発売され、その面子紙絵から切りぬいて、手製の円形の厚紙にはりつけて用いるようにもなった。遊び方はいろいろあるが、普通は地面に円形を描いて、その中から他のものの面子に打ちつけて、円形の外に弾き出したものがそれを自分の所有とするやり方で、そのほか投げ合って表が出たものが勝とする遊び、ほか数種ある。江戸時代中期に始められた遊びで、文政十三年（一八三〇）の「嬉遊笑覧」には、「小児の面形は面摸なり、瓦の摸に土を入れてぬくなり、また芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが、今はかりて銭のようにて、紋形いろいろ付けたる面にはあらねど面打（めんちょう）と呼ぶ」と見え、初めは芥子面を地に投げて勝負するための古銭のものが生れたのであろうといっている。明治時代の流行期には駄菓子屋で販売され、相撲の力士などを面子絵にしていた。

麦笛（むぎぶえ）

草笛の一種。植物の葉や茎をとって笛とする。例えば葦笛や椿の葉笛などは、虫笛（例えば蚊子樹の虫をとって作る蚊子の笛）と共に、自然楽器としての原始的な発源である。麦笛となると、野生の麦を加工せずに、そのまま切って笛とするものではあるが、人間が耕作を知った後の発見である。しかし「和漢三才図会」に、「大小麦中空白、小麦稈鳥硬、小児用以麦笛之也」など記されたため、江戸時代の製作のようにいわれているが、それよりずっと古い起源を持つものであろう。